

第155回くらしの植物苑観察会 2012年2月25日(土)

みかんの戦後—甘さと安全性のあゆみ—

原山 浩介(本館歴史研究系准教授)

こたつの上にミカンがあり、みんなでミカンを食べる家族の団らん。こんな様子は、四コマ漫画にも出てきそうな、典型的な冬の家庭の様子でした。ところが今や、そんなふうにはミカンを囲む場面は少なくなり、ミカンの消費量自体も落ち込んでいます。

ミカンは、日本の食に関わる習慣や嗜好、農業、そして「食の安全」などをめぐるここ数十年の変容を考える上で、大変興味深い題材です。

ミカンが高級品であった時代から、次第に大衆化したのは、おおよそ高度経済成長期でした。その背景には、一般的に家計に余裕が生まれたこともさることながら、1960年代の生産の拡大による価格の低廉化がありました。さらに、ミカンの味もまた、酸味よりも甘みが際立つようになり、いろいろな意味で、誰の口にも入りやすいものになっていきました。

もっとも、この過程で、いくつかの問題も起こり始めました。ちょうどミカンの生産量が増えていった高度経済成長期は、農家の農薬使用量も爆発的に増えた時期でした。農薬による被害は、因果関係がつかみにくい慢性的な毒性による被害から、急性毒による死亡に至るまで、実に多様なものでした。そうしたなかで、農薬による被害をめぐって、国と農薬会社を初めて訴えた農家は、実は和歌山県のミカン農家でした。この裁判は「農薬裁判」と呼ばれ、十数年にわたる裁判の末、「和解」という形で終結しましたが。その間に、農薬に対する日本社会の受け止め方は少しずつ変化し、「安全」であることの大事さや、「有機農業」が、次第に知られるようになってきました。

ただ、特に1990年代以降、ミカンの消費量はずいぶんと下がり始めました。端的に言えば、果物をあまり食べなくなったのです。しかも、輸入自由化で海外から様々な果物が輸入されるようにもなりました。そうすると、困るのはミカン農家です。高度経済成長期にミカンの作付けを増やした農家が、ミカン価格の下落にさいなまれ、ミカンの減反が始まります。

そうしたなかで、高付加価値の果物に取り組もうとする農家も登場し始めました。ミカンに限らず、梨、ぶどうなど、様々な品目で、新しい品種が開発されています。それらのなかには、さきほどの、ミカンが甘くなってきたという、その甘さを遙かに超える、お菓子のように甘い品種も少なくありません。

高級化するやたらと甘い果物と、ますます手頃な値段になるミカンを見つめながら、私たちの住むこの日本社会の数十年を見つめ直してみると、いろいろな発見があると思います。

.....

次回予告 第156回くらしの植物苑観察会 2012年3月24日(土)

「ヤクスギの秘密」 柴崎 茂光(当館研究部民俗研究系)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要